

韓国国立リハビリテーションセンター訪問報告書
(日中韓リハビリテーションセンター相互連携事業)

自立支援局自立訓練部機能訓練課
機能訓練専門職 松橋次郎

1 はじめに

日中韓リハビリテーションセンター相互連携事業の技術交流により、韓国国立リハビリテーションセンター（以下、KNRC）を訪問する機会を得た。合わせて、韓国内の視覚障害リハビリテーション関連施設を見学したため、以下の通り報告する。

2 日程 平成28年2月23日（火）～2月26日（金）

2月23日（月）出発（移動日）

2月24日（火）韓国国立リハビリテーションセンター（Korea National Rehabilitation Center）見学

2月25日（水）韓国視覚障害者連合（Korea Blind Union）見学

2月26日（金）シロアムセンター（Siloam Center For The Blind）見学、帰国

3 派遣職員 2名

病院第二診療部眼科医長 清水 朋美

自立支援局自立訓練部機能訓練課機能訓練専門職 松橋 次郎

4 見学内容

KNRCでは、患者の90%が脳血管疾患や脊髄損傷者であり、回復期の患者を対象とした治療とリハビリテーション（PT、OT、ST、心理、自動車訓練等）を提供している。国立のリハセンターは韓国内にこの1箇所である。建物は新しく、清潔。廊下は広く大部分に手すりが設置されており、その雰囲気は日本国内の施設とよく似ていた。

眼科には眼科医が1名在籍しているが、見学時は産休に入っており不在であった。視覚障害リハビリテーションは行っておらず、歩行訓練（orientation and mobility）やロービジョン訓練等については地域の福祉施設で提供している。

KNRCには一般の方を対象にした身体障害の学習・体験ができる屋内設備がある。市街を模した道路、段差やスロープ、交差点、電車とホーム、バス等の模型があり、そこで車いす移動やアイマスク移動を体験でき、体験学習により障害理解を深めることを目的としている。この施設は小学校の児童等が主に利用しており、子供の頃から障害について触れ、考えることの重要性に着目して取り組んでいる。この施設の利用希望者は多く、1年間の予約が募集開始から3日間で埋まるという。

研究所では主に肢体不自由を対象とした福祉用具の研究がなされている。KNRCの臨床医師が研究に携わるなど、総合センターとしての特徴が窺えた。

次に訪問した韓国視覚障害者連合では視覚障害者の福祉全般について話を聞くことができた。韓国内の視覚障害者は25万人。障害程度は1～6級に分けられ、登録カード（日本の障害者手帳に該当）が交付されている。1～2級は更新を必要とせず、3～6級は更新がある。視覚障害者の職業はあん摩が中心で、約1万人が従事。あん摩の職には視覚障害者のみがか就くことができるよう法律で定めら

れている。あん摩以外の職種は少なく、視覚障害者の就労は大きな課題となっている。日本の点字図書館に該当する施設があり、点字図書やデイジー図書を貸し出している。歩行訓練士の養成研修は4週間でされており、日本同様にアメリカの技術を元に行っている。同連合では主に1～2級の視覚障害者に対し、歩行、パソコン、日常生活、点字といった訓練・教育プログラムを提供しており、今後「古い」をプログラムに加えることを検討していた。

最後に訪問したシロアムセンターは眼科医療、視覚障害を対象とした訓練（歩行、点字、パソコン、音楽、ベーカリー訓練等）、就労支援、図書の貸出しや配信等のサービスを包括的に提供している。姉妹関係にある日本ライトハウス（大阪府）と定期的に交流し、理事を務める牧師のキム・ソソテ氏は自身にも視覚障害があり、過去に日本ライトハウスで教育を受けた経緯がある。運営資金の90%は政府からの支援金、10%が寄付で成り立っている。興味深い取り組みとして、視覚障害者を対象としたバリスタ養成の訓練を提供しており、修了生をシロアムセンターが運営するカフェで雇用している。一般の飲食店での就労を目指して取り組んでいるが、残念ながら現状ではそれに至らず、就労先は独自運営しているカフェに限られている。

ソウル市内の様子を見る限り、電車の駅構内の点字ブロックの敷設状況は日本国内とほぼ同じであった。また、今回利用した全ての路線と駅にホームドアが設置されており、障害者のみならず全ての方にとって安全に利用できる駅となっていた。また、電車とホームの隙間や段差が小さく、車いすが駅員の介助やスロープがなくとも単独で直接乗降できる。一方、街の歩道の点字ブロックについては、交差点の手前等の要所に限定して狭い範囲に敷設するのが一般的のようであった。

今回の訪問により KNRC の取り組みのみならず、視覚障害リハビリテーションの状況を知ることができた。特に視覚障害リハビリテーションについて、具体的な指導法の確認には至らなかったものの、訓練科目は似通っていることが分かった（歩行、パソコン、点字、日常生活等）。使用されている用具も日本のそれとほぼ共通で、デイジー図書再生機については日本製品も使用されていた。韓国と日本で多くの部分において類似していたことは印象深い。

最後に、今回の韓国訪問という貴重な機会を与えてくださった関係者の皆様、暖かく歓迎して下さった韓国国立リハビリテーションセンターLee 総長、他職員の皆様、韓国視覚障害者連合、シロアムセンターの皆様、そして、ボランティアで長時間の通訳に同行してくれた趙基銀氏に深く御礼を申し上げます。



KNRC にて Lee 総長を囲んで



シロアムセンターが運営する「Café More」

平成 28 年 2 月 23 日～26 日の 3 泊 4 日で、日中韓連携事業の専門職技術交流で韓国を訪問する機会を得た。今回は、自立支援局自立訓練部機能訓練課の松橋次郎機能訓練専門職と私の 2 名が派遣された。日常的に病院眼科外来で視覚障害の患者を診察し、ロービジョン訓練のスタッフとともにロービジョンケアを行う私にとっては、隣国である韓国の視覚障害者の実態やロービジョンケアの進め方について大変興味があった。

今回は、韓国国立リハビリテーションセンター(Korea National Rehabilitation Center ; 以下、KNRC)のご配慮により、韓国視覚障害者連合(Korea Blind Union; 以下、KBU)、シロアムセンター(Siloam Center)の三か所を訪れることができた。KNRC は、当センターとも協力協定が結ばれているナショナルセンターであり、これまでも双方向に職員間交流が行われているが、今回は初めての視覚障害領域の交流訪問となった。KNRC の眼科医は 1 名在籍しているが、特別休暇中であり残念ながらお会いすることができなかった。KNRC の 90%以上は脳血管障害による高次脳機能障害の患者で、眼科もそれらの患者の視機能評価が主であり、当センターで行われているような多職種が関わる包括的なロービジョンケアは行っていないとのことだった。自立支援局で行われている日常生活や歩行訓練に関しても行っておらず、KBU やシロアムセンターのような外部施設に委託されていた。しかし、今後は KNRC として視覚障害、聴覚障害のリハにも力を入れていきたいというお話もうかがった。私どもの訪韓に際し、KNRC から KBU とシロアムセンターに連絡を取り合えたのは KNRC にとっても好機だったようだ。KNRC で特に印象深かったのは、障害の一般への啓発に対する取り組みだった。実物さながらに電車のホームやバス停留所で点字ブロックが敷かれたコーナーがあり、実際にアイマスクと白杖を持って視覚障害者歩行の疑似体験をすることができるようになっていた。学校等の外部に体験募集をかけると、毎年募集開始から 3 日間で 1 年間分のスケジュールが埋まってしまうほど人気があるとのことだった。ほかにも車椅子疑似体験ができるコーナーも設置されていた。また、視覚障害ではないが、実際に訓練を終えた患者を講師として雇い、同じ障害の患者に対しピアカウンセリングを行っているという点もナショナルセンターとしてはユニークな取り組みだと思われた。また、リハビリテーションに特化しているため、手術加療は一切行っていないとのことだった。韓国では、ナショナルセンターならではの特徴らしく、他のリハビリテーション病院より患者が負担する費用が安く済むという点があるようで、大学病院等と連携を図りながら病床稼働率は 80%以上を維持しているという話だった。

次に訪れた KBU は、日本盲人会連合の韓国版のような組織だった。韓国には視覚障害者が約 25 万人いて、日本と同様に 1～6 級まで等級が分かれ、登録カードとよばれる手帳に相当するものが発行されている。KBU は、1 級、2 級に該当する約 4 万人を主に対象として、教育、訓練、雇用を主軸に活動しているそうだ。韓国は視覚障害者のみがあん摩業に就けるそうで、仕事を持つ約 3 万人の視覚障害者のうち、約 1 万人があん摩業に従事している。他に社会福祉士、宗教家、占い師をやっている人もいるそうだ。目下の課題は、眼科医療機関との連携だそうで、視覚障害者への眼科医の理解が不十分であり、病院に関連資料を置かせてもらうこともままならないとの話だった。逆に、日本でのロービジョンケアにおける医療との連携状況について問われたため、当センターで行っている視覚障害者用補装具適合判定医師

研修会等の関連情報提供をしたところ、大変興味深く聞かれていた。

最後に、シロアムセンターという視覚障害者の訓練、就労等、包括的に対応できる施設を見学した。ここは、キム・ソンテ氏というご自身も全盲の方が牧師であり、組織の理事長とシロアム眼科病院という眼科医約15名を擁する病院の院長も務められている。この病院があるため、シロアムセンターは医療との連携も比較的うまくいっているようで、最近では発展途上の国々にも眼科医療とロービジョンに関して技術提供を行っているそうだ。もともと、キム・ソンテ氏が大阪にある日本ライトハウスで訓練を受けていたことがきっかけで、日本ライトハウスと協力体制にあり、定期的な交流があるとのことだった。この施設の訓練でユニークだったのは、音楽とコーヒーバリスタの訓練コースがあることだった。音楽は本格的なもので、海外の有名な音楽ホールでコンサートを行っているそうだ。コーヒーバリスタは、Care More というコーヒーショップを全国で6店舗展開していた。その一店舗はシロアムセンターの1階にあったが、店内の一角に拡大読書器や点字図書が置かれ、さりげなく視覚障害について啓発できるように配慮されたモダンな雰囲気のコffeeショップだった。

以上、3泊4日のとても内容の濃い韓国滞在であった。今回の韓国訪問の機会を与えてくださった関係各位、ならびに韓国と日本語の通訳をボランティアで対応してくれた趙基銀氏に深謝するとともに、本事業での私どもの訪問を快く受けていただいた韓国国立リハビリテーションセンターに心から感謝の意を表したい。

KNRC 総長室にて、Lee 総長を囲んで

